

老葛蒲の系

三編

全



^13
3846
3



門 13
3846
3

花葛蒲浮之葉の序

好文堂

人^{ひと}有^{あり}問^とて曰^い武^ぶの^の練^{れん}佛^{ぶつ}の^の才^{さい}伎^ぎ乃^{なり}
手^て管^{くわん}世^せ事^じ追^つ後^ご或^{ある}許^{ゆる}は^は安^{あん}終^{しゆう}説^{せつ}説^{せつ}
俗^{ぞく}よ^よ公^{こう}票^{ひょう}さ^さハ^ハ大^{だい}の^の詐^{うそ}人^{ひと}と^と化^{くわ}と^と須^す更^まも
亦^{また}離^り色^{しき}離^りる^る物^{もの}を^を是^{こゝ}に^に先^ま奏^{そう}茶^{ちや}の^の能^{のう}書^がハ
飲^{のむ}共^{とも}半^{はん}古^こ竹^{ちやく}ぞと^と強^かひ^ひあ^ある^る見^み世^せ物^{もの}は^は看^{かん}板^{ばん}
小^こ中^{ちゆう}ら^らあ^ある^ると^とま^まは^は三^{さん}分^{ぶん}一^{いつ}安^{あん}の^のあ^あら^らハ
先^まと^と受^うレ^レ其^{その}俗^{ぞく}を^を結^{むす}ぬ^ぬ。詐^{うそ}と^と先^ま入^い

四半の七六三二

録坐早六卷
貸本所 好文堂

安んじたり。安れど白己が售物と面一後
 のいじと卑む者。宇宙江湖の每答と史著
 者の恒と。御史の拙し文託し。卑下其の
 強退穉讓といえり。曰。此の能も次致作
 者流が手よ集るもの。い。実と虚よ。就案
 虚を種ゆ。虚よ虚を添るを蛇と
 号し。換音集體をといえり。い。をいひ
 概ふ。空と合。張字の備畫の失也。

ぬ。り。昔換ら。刻削の過ゆ。の。の。の。
 ぬ。放。三味。嫩。情。者。様。を。信。務。を。急。事。
 安んじ。バ。家。早。半。に。集。ま。り。な。り。ど。い。ま。は。ま。
 作。を。札。の。向。ひ。何。の。作。を。繕。出。さ。ぬ。と。い。ふ。
 母。を。行。う。活。業。よ。文。拙。し。と。云。ん。い。ま。は。ま。
 の。安。ん。じ。の。い。ま。は。ま。の。い。ま。は。ま。の。い。ま。は。ま。の。い。ま。は。ま。

ふくろの有人記

温の巻三十一

翠の紫三上



濯の紫三上





花分

花分

花分

花分

三遊亭

圓朝

圓朝

一葉齋
芳翁筆

花菖蒲澤之紫三編上卷

東京

山々亭有人補綴
三遊亭四朝作話

才十三回

源氏物語にも指切髪切の實ある。二条の后は
 宗由かいらんの意氣地へえり。この座末を和
 か敷若小端書せられ。蜀山海が指言ありて京の
 女不言の強を拵せ長崎の衣裳を忌々難波の
 揚屋で拵真。この此上もるき。借後の壁哈小

引廻るりうー。金まぶ松景屋のあ草ハ驚るをま
 の馬をを左迄ハとて辭子。至えくおとるせー
 より侍客ハさるがらふ。蓬来家ハ入るん地。魂有
 頂舌加ふ。花が如くの想寄りて通えど。まの。驚愕の
 倉ハ俱おせざる。とるん。今日由。在。安。を仕。者。並。其。昏
 比より。屯。播。る。一。強。妓。舞。回。の。隊。開。由。隊。付。の。お。田。と
 只ハ。隊。禰。の上。ふ。毒。持。び。る。が。ら。花。口。と。陶。持。を
 至。奇。重。也。コウ。か。い。らん。政。を。一。て。さ。じ。ア。イト。答。て

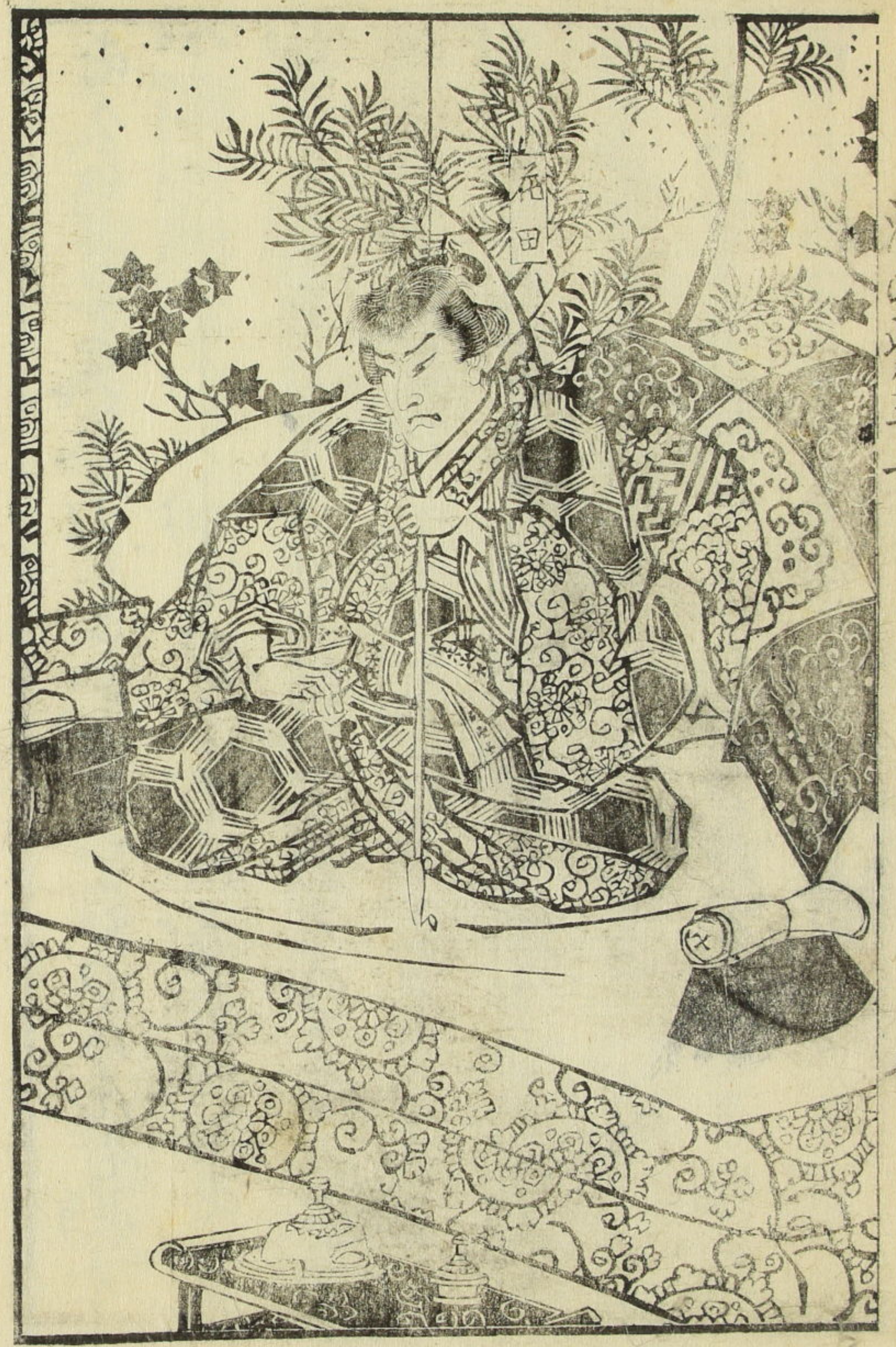
雛妓。お。泥。陶。持。を。操。て。つ。ぎ。ふ。く。れ。ば。さ。か。ぬ。一。で。も。己
 る。も。お。ね。が。る。ら。ば。か。い。らん。お。政。を。一。て。費。ひ。な。ま。し
 ても。今。か。い。らん。ハ。御。先。が。舌。ま。ま。苦。痛。め。り。て。お。ま。る
 ま。ま。一。ま。ぢ。や。ア。哲。時。時。と。致。そ。う。信。ヲ。ヤ。保。り。さ。る。で
 毛。子。此。時。既。お。若。草。ハ。火。津。の。傍。お。ま。ん。が。り。と。後。て
 久。安。言。信。る。き。男。の。う。人。を。お。事。下。戻。お。火。若。で。仔。の
 脚。の。仔。の。字。の。字。を。書。て。ハ。消。一。け。一。て。お。ま。一。て。有
 ける。が。何。以。ひ。け。ん。下。ま。く。信。ん。と。る。毛。を。お。田。ハ。え

かりき「アイ」かいらん侍ワシ「アイ」今「あま」用がある
 再び「あま」はきて是非もあく「あま」何ぞ「あま」用でまう「あま」用と
 云て他でも「あま」おゝおゝ地とやうが此席の「あま」借るも志ま
 ねうま「あま」ぢやア「あま」まり「あま」怒るうらう今「あま」悪痛らう
 のふでも「あま」ねが丁度二月「あま」様「あま」の初日「あま」あうも「あま」ぬーが近
 中の「あま」鋪先「あま」不「あま」居く「あま」女房と「あま」何「あま」危「あま」怪「あま」を「あま」被て「あま」居る時
 へ「あま」夫婦「あま」もあるものとぞつと身「あま」不「あま」潔「あま」意「あま」同「あま」不「あま」禁「あま」少「あま」古
 風「あま」る「あま」せりふごが「あま」宅「あま」へ「あま」返つて「あま」森「あま」て「あま」見「あま」て「あま」由「あま」かぬー乃

容貌「あま」が「あま」眼「あま」ふ「あま」ち「あま」ら「あま」つ「あま」き「あま」志「あま」ま「あま」松「あま」と「あま」思「あま」ふ「あま」る「あま」ど「あま」い「あま」よ「あま」く「あま」暮
 元「あま」悩「あま」心「あま」ま「あま」う「あま」ら「あま」急「あま」不「あま」道「あま」中「あま」へ「あま」憑「あま」こ「あま」ぬ「あま」ん「あま」でも「あま」左「あま」の「あま」右「あま」のと
 忽「あま」俸「あま」ら「あま」く「あま」侍「あま」の「あま」志「あま」初「あま」志「あま」別「あま」深「あま」く「あま」熱「あま」志「あま」を「あま」ま「あま」る「あま」る
 出「あま」指「あま」と「あま」い「あま」ふ「あま」る「あま」の「あま」恩「あま」ふ「あま」ら「あま」けて「あま」云「あま」ぢ「あま」や「あま」ア「あま」ね「あま」が「あま」ま「あま」の「あま」是「あま」由
 合「あま」息「あま」と「あま」大「あま」屋「あま」め「あま」う「あま」して「あま」作「あま」通「あま」り「あま」そ「あま」尾「あま」能「あま」お「あま」と「あま」る「あま」つ
 の「あま」常「あま」解「あま」の「あま」時「あま」時「あま」並「あま」敷「あま」日「あま」来「あま」て「あま」視「あま」て「あま」も「あま」教「あま」具「あま」の「あま」あ「あま」人
 志「あま」不「あま」潔「あま」が「あま」ま「あま」る「あま」ど「あま」不「あま」潔「あま」る「あま」ら「あま」せ「あま」めて「あま」致「あま」ぐ「あま」ら「あま」い「あま」して「あま」くれ
 て「あま」ま「あま」ん「あま」ご「あま」ら「あま」不「あま」律「あま」の「あま」正「あま」規「あま」も「あま」意「あま」る「あま」め「あま」へ「あま」ま「あま」と「あま」も「あま」昨日

逆軍で我は九月の夜に船を以て早して去る。
 彼を去るものか仁なる。さういふ船に在らうと云
 うもの有つれど。自己の言由れ月とありやア。故生が波
 る由に不慮のうみの出来ども。さういふもの合せ極ぐと
 と云ちやア不都合だト。此のうのがおふらぬ。まともは
 おまかだ。あつて怒るくあつてゐるのう。さうして理屈を
 笑ふと。さういふものも善く。徳も思ふを極ませ。
 善うつむきて居るものだ。おぼろぎのうとありし出
 まで

まくらに逆軍で是非ととお馬のをおつらん由長イ
 四痛折角来く中まつて由ホシ血産後症でまくら
 知る血脈をおつてせりお馬極りのるんでまくら今
 間におつりを彼の方で置安らうとありと事ハ
 幾夜ごろ志をせんが。産後症でも血うらと此作友
 出中せうと此の切合ふ多うこのでまくら。何をのふ
 一由かいつらんが病氣でお出のうごひますうら病
 をしてあげるん。ま由お極あり逆軍くら移く



して是田松ふ九月の雨を私せうら山憑りせ
て是ま〜ト候が有ま〜ころの難有うのあり
ませう。事ごあの通り是田松也。お生衣限の事
をせうら。氣をうちふ形ひませうと各候の
方ぢやアおあところをゆたんで何う休が是田松
の〜のの。百や我百ふおとひ〜の〜の
憑り〜して此後候と。事お内室松が
せせめら。お是松のま〜ごう。候支の〜の〜

まへんころ。百委松中と白前来て是ま〜の〜の
的ふ波あるぢやア有ませんけれども産波の〜の〜
お限りてま〜出まある〜の〜の産まふまるとま松のぢやア
ありまへん。ま〜ま〜金〜の〜の〜の〜の〜
あるればお成もあ〜の〜の〜の〜の〜の
二階〜かゆ〜由は事〜奇麗〜の〜と産〜自己
が是料松の鬼由角由中身〜の〜の〜の〜の
控まふ〜とも二百や四百の産打〜の〜とあるおあ

畢の茶三上

し

道をかぬし寄頼りくさふをゆしてるふ合せる
 かの居「言」席ら「い」のををかざるま「吾」依せが
 手拵指儀るを以寄頼りふして何ふ志ませう
 示「かぬし」ふあづけても仕方あるまのうそを
 の内候ふ候とて典物の因縁をして貰うがのちや
 ねり「折」角の四條切でまうのちもたも近守のか
 内室とんふお徳を「ませう」示「ま」あ「い」の
 げ「ま」ふ「ま」近守を「ま」ふ「ま」ら「ま」う「ま」を「ま」り「ま」と「ま」ち「ま」や

卯老の地室を現ま極ごが是後思ふ自己がま
 の晴る極中して呉極の卜制るが常の鬼麻毛も
 金響ひく吾愈るく下「ま」ゆ攻んと能を
 のれ「ま」現「ま」活「ま」を「ま」茶「ま」の「ま」時「ま」を「ま」も「ま」然「ま」然と
 さ「ま」茶「ま」向「ま」て「ま」居「ま」る「ま」り「ま」が「ま」漸「ま」く「ま」お「ま」教「ま」を「ま」あ「ま」げ
 示「ま」を「ま」田「ま」を「ま」ん「ま」種「ま」く「ま」以「ま」條「ま」切「ま」お「ま」難「ま」有「ま」う「ま」で「ま」ん
 あり「ま」ます「ま」が「ま」手「ま」極「ま」大「ま」切「ま」の「ま」もの「ま」を「ま」以「ま」寄「ま」頼「ま」り「ま」か「ま」して「ま」も
 ん「ま」配「ま」代「ま」を「ま」教「ま」ます「ま」う「ま」ら「ま」近「ま」守「ま」を「ま」ま「ま」ふ「ま」ま「ま」る「ま」ふ「ま」ん

及びそのせん亦か前極のか煮の暗る極ふとい何夜
 まるのうありまへんが何をいふも形ゆりて痛氣
 のもでありますすうう「痛氣とあるは是非由る
 き次第であらぬが是れどつと余も悉く居るとい
 ふでいふ一自侘痛ひい何だ治「系いらく苦勞
 るものから起ツタのも又も種く痛ひが重るりて居
 ので毛「醫者の何と云ツて居「別ふ末ご也醫者
 扱ふかうん「取まんむ「取も取るの位る病人

を醫者あもえさせるのといあまのり不教ふるの僕偉
 名醫お怒る者もあうらほふまうら「思石
 つかうまううざんまがが醫者の業の吞まへん「
 云愛ごるを皮のど痛氣で初も出来あいの者か
 醫者の業を吞るのとい愛ごん能だ「乃不極
 のは禁上を怒つり亦此業も任載て居り外う
 「史で業を吞るのといのう「アイ「不竟いかい
 んだ乃不苦薩へ変るそんる斥言地る仁ぢやア

あり能位んさくまりやア初く醫者不能愈業
 を割極不加護をして身中ハトせくら笑えは若菜
 由麻積節を歌へ出―若「どうどうそんるりの志
 里まらんが心醫者の業ハ吞まらんくら止てかん
 るそのま―と云早れてお田も懐然せきこも云「チイ
 かゆんイヤサ若菜是程と小侍が安目を賣て悪む
 のおかぬ―やアさふでも不承初うト臥褥のうへ不記並
 り眼を運立て云々れば若菜見ん子く中ふ入り

源「モシを田極おいらんも種く毒のりある事もあり
 夫小痛毒とのおめんで毛めら麻と各依が心若極の
 心毒切を能かいらんの物お落る極小作―を致ま
 せうめらマア軍中―てお呉シ候む「何も媚妓子性
 を對ふおちやな云ても秘人があんまりる麻く―の
 くらと若く思ハ止ざりしが若菜何の若るく意の
 うちあひ仔の助の形迹をさうらさうりせべ系系初
 念ハ受もせぞ交まの形―と怨き目お逢ハせまぐ

と見ふ波を恨て居るしりぐきせまきい女の輩
唯一回不御審りグット吾込む持痛の積ウントをり
里不反久ま六若治あるやと抱起し信「かいらん
あつろりしてお呉ん成モシかいらん反るすするヨト
禿を見ぬり信「お前事や疾誰ぞほく来るヨトあ
くせく氣を怒おどむ回由臥得の上を下む若治
困ごこのご押てきらうろ信「止く呉るまーお前
極の過るんでせむ「ナ一月己の志ごするウト口おへへ

ど親の毒穿ふまごくくるもろち若者スハかいらん
不緯ありと慣閑く二階へ来り力但せ不反を押
然るも清不醫考さく近附加減の業を服さす
ま六ぬく積の倉りり

才十四回

今日来もどあやめもあくるぬ社知むろを
ねのそくらくと誣せし聴ふあし秘ども茲も意
蒲の名ある堀切村不伊の助の岡居せしより

お小金山の便を止らるるは今も茶が身の上
不幸あるものあらんとおあやめもあらせぬ
下もお薙て一仏徒然茶を漬居りしが香
の貴茶持来り「且ねお茶がものなり」
「お茶といふ時分りなる。種秋の日の短ふ今
以益を管こそるりの扱るん持て」
「までも以取る
わら佐助を「お茶を」このが取く集りま
し」
「お茶の歩りといふ奴の磨いりの」
お茶の

中へ吞る是は王のり「い五何中り物色へ出来
このとやてお茶を東喬扱が持来り候このでござ
外「お茶を」お茶の合も巨こそが香口の格
通「お茶」お茶とや外の「お茶」お茶とござり外
「お茶」お茶の際にお茶を「お茶」お茶とむりし通
法「お茶」お茶を「お茶」お茶とむりし通
種のお茶「お茶」お茶とむりし通
お茶とむりし通

お茶の

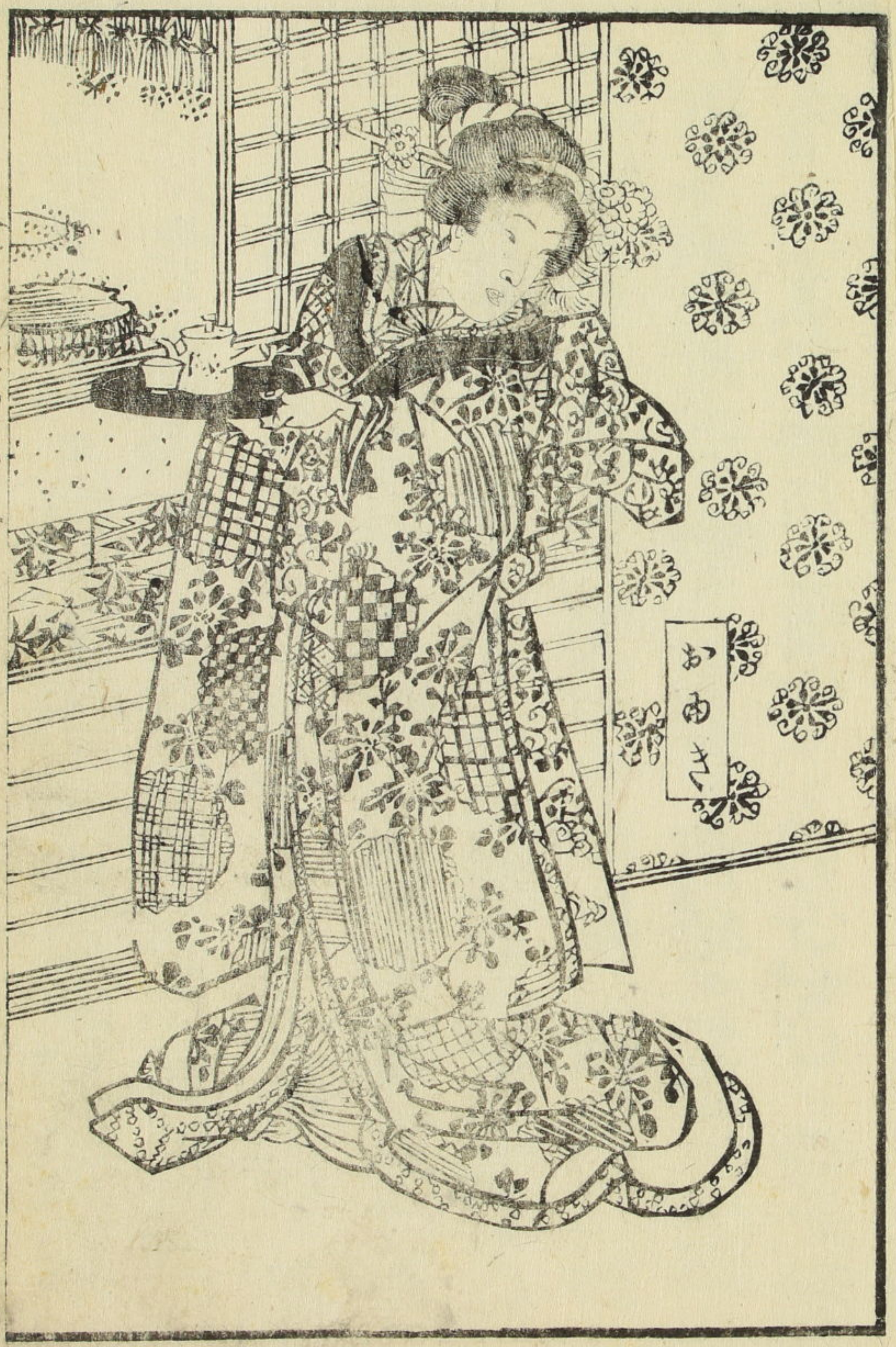
お茶

祝き言「種々なるものをかばやス極て此處一外が此後
 の九返ある女の髪を扱ふを扱ふは治めの大業も能く
 との何の事でもございませう 侍「これハ傳説にあり
 て威徳陀羅尼種とのみのお女人髪を以て潤維と
 する一香を結つるぐ況や丈夫の業をやと云ふが
 ありて大業さへも洋種ごうら男の當事ご下りの戒め
 が前極も妙なりと疾自己の方へ引取れ今ふ
 意母さんふるる體ごめらひらつとも万事可し

居極のあら近所の男を奉送させおまると
 らう件々女の飛隙のほりのごとりのたれ
 して見りやアか前の飛隙を余ッ種消滅
 させく悉る極るりのご 吾「吾候るんぞ六以用
 燈灯とやうと愈々人のありませんが人を
 運日せく飛隙が思けさば中を居るんをも金
 種か悉くごごいませう 侍「大業をく以て
 とう灯お死せ方やぐト業の所改で側へ寄

澤の巻三十一

Handwritten Japanese text in a vertical column, likely a list of items or a table of contents. The characters are small and densely packed.



人ありやアーねへ 謙遜 仕作 松糸 屋の 志州
さんとやういふお通 通ッく 自分て 此を 沈め
こと 車 どの ござい ません け ありやア 祝文の 石
塔 ぐ 立 流 不 建 とい たら 云ッて 身 を 賣ッ の だ ね
格ヨ 自己 由 ト ンダ 魔 ぐ さッて あ の 女 不 存 時 逢ッ
あつこ ころ あり ころ 格 里 不 惑 ち 成 を 取ッて 意
と まる 夕 多 初 運 命 の 自 由 不 立 出 ころ あり 格 人
ころ ころ 不 され け せ と 返ッく 宅 へ 願 目 ぐ 寄ッて 石

於 合 不 あり ころ あり 初 の 糸 氣 何 西 へ 中 井 付
の 不 出 ころ あり 活ッて 有ッころ あり 大 方 今 以ッ
その 不 出 ころ あり して 格 ころ あり ヨト 部 人 け 格 の 中
へ 蔭 ころ あり ころ あり 不 立 出 不 出 暮 口 より 小 腰 を 屋
め へ 一 葉 あり あり 葉 ね ち 夜 ころ あり 外 あり 託 ころ あり
ます と 喜 ば ね 考 へ 年 の 比 び 十 通 不 とき 女 あり 紙 好 油
の 蔭 万 節 不 下 不 あり 不 出 教 と あり ころ あり 柳 の 丸
帯 を 前 て 結 び て 脇 付 の 袖 へ 昔 流 形 五 納 戸 結 中

翠子の世系三二二

十二

惟お見せても在方の百性賢翁の内後あり十七八のお
奴を佐お連てぞ来りしをふま傍との入る體者もあは
海邊とまへ出きまづつらぬを伺う傍でござの仲が
おの春本町のきのふを極の口別荘の世方でござの仲が
子へいきの國屋の別荘のち花でケスガも君のどちら
かまはぬこ子へい君海邊のち路の矢切うも事ありこと
てふま傍の唇お落毛首に向く居つりきり
茶首蒲沢は雲二編上巻 竟



花菖蒲澤之紫三編中巻



東京 山々亭有人補綴
三遊亭四朝作話

才十又四

暫時ありて件のおま傍「あんど下路の矢切ダ私
どもとく矢切あんどお取引のござのませんが門邊
ぢやア多のう子へい門邊ひでござのませんが旦那の
伊の御極が女方の家におまはるら目おめり里夜
んど休ふ「美且おのちあも女方お入ますござ

三編の此卷三ノ口

以得情中ついでにで何なにあくらままの以仁いじんあもかあま通せりとほああ復たがひの
 出来できません何なんの以用いよううそんとまませんが僕ぼくが伺うかがひませう
 「お前まへ様さまありや」この所ところが坊ぼうの町まちの町まち一ひとでももござりませんうら
 一ひと是これの怪け一ひとくぬ僕ぼくのまふ湯ゆとちてちてあ且かつ助すけの以附いふく人ひと
 お中ちゆう附つられまま一ひとご代しろでござります僕ぼくがふふつとと解と解とんと
 の以依いのござりません「お様さまあら白しろ票ひょうてて見みませううが各それぞれ
 候まうの松まつ葉は屋やの若わかし茶ちやが徒かた母はでござり外とが若わかし州しゆうのことすお
 附つまま一ひとてて態たいくく事ことととまま一ひと以い高たか人ひとおお目めふふううりりませ

んでんの事こと一ひといかいか一ひとも出来でき兼かん外がいくく怪あやりりああぐぐおおすす
 を侍さむらいの町まちさんさんおおりりかか一ひとてて昭あきてて下くだささの「是これの以いの以い既既に
 お世よ友とも若わかし且かつ助すけががああううるる以い部ぶへ押おし巻まきままくく以い不ふ自じ
 由ゆをを以いののもも原もととと云いふふ若わかし州しゆうさんさんううらら發はつつ事こと形かたちで
 この以い助すけ不ふ降くだるる若わかし茶ちやさんさんの苗なえ家けおおちちて
 の天てん魔ま破やぶ神かみ若わかし且かつ助すけののかかおおのの身みをを腸はらふふ身みがが才さい一ひとまま
 等らのの使つかいをををを避さげげるるおおおお附つ属ぞく垂たるる僕ぼくががおお一ひとててをを換かへへ
 以い不ふ次じがが出来でき外がいののうう疾はや攻こうつつ下くだささののトト云いははれてて怪あや母は

も横たのせーグ思ひ復して物極かり〜
 まり多女家の
 るどくらの唯下取りふ笑ふ極つ〜
 極思ふまの由
 のでもあのぐまといふ世理屋の遠〜
 か活〜系多草
 の唇海客が姉の娘とござますすぐどか〜
 ござくは
 の助さんふつ惚て娼妓あるつ〜
 ござ入赤伴の助
 さんも突出〜のび〜ま〜
 海切〜して新米のり返
 も狂作て下さるものどくらの商人も一入か一樽ふ思つて
 居ま〜
 雨が女長及来絶のたを引〜
 とヤ〜
 とうら

壁端極もあの程ふ音も沙汰も有ま〜
 ねん膝でも入
 ま〜
 腹をござら〜
 かなう何極〜
 ござる〜
 病氣ふ取つ〜
 くれまを〜
 病氣ふ取つ〜
 何の助さん由はなるも〜
 ござあるが身重る懸〜
 あり
 てる居り〜
 是ぢやア物も出来ま〜
 と旦那どんの海切
 るどくらの石浜の室へ出ま〜
 生ふ来て居ま〜
 ア純
 ま〜
 臨月も言〜
 尾能身二ツふ極〜
 とうら
 へ赤身人へ度〜
 動をま〜
 ござ入赤伴の生産〜
 小児

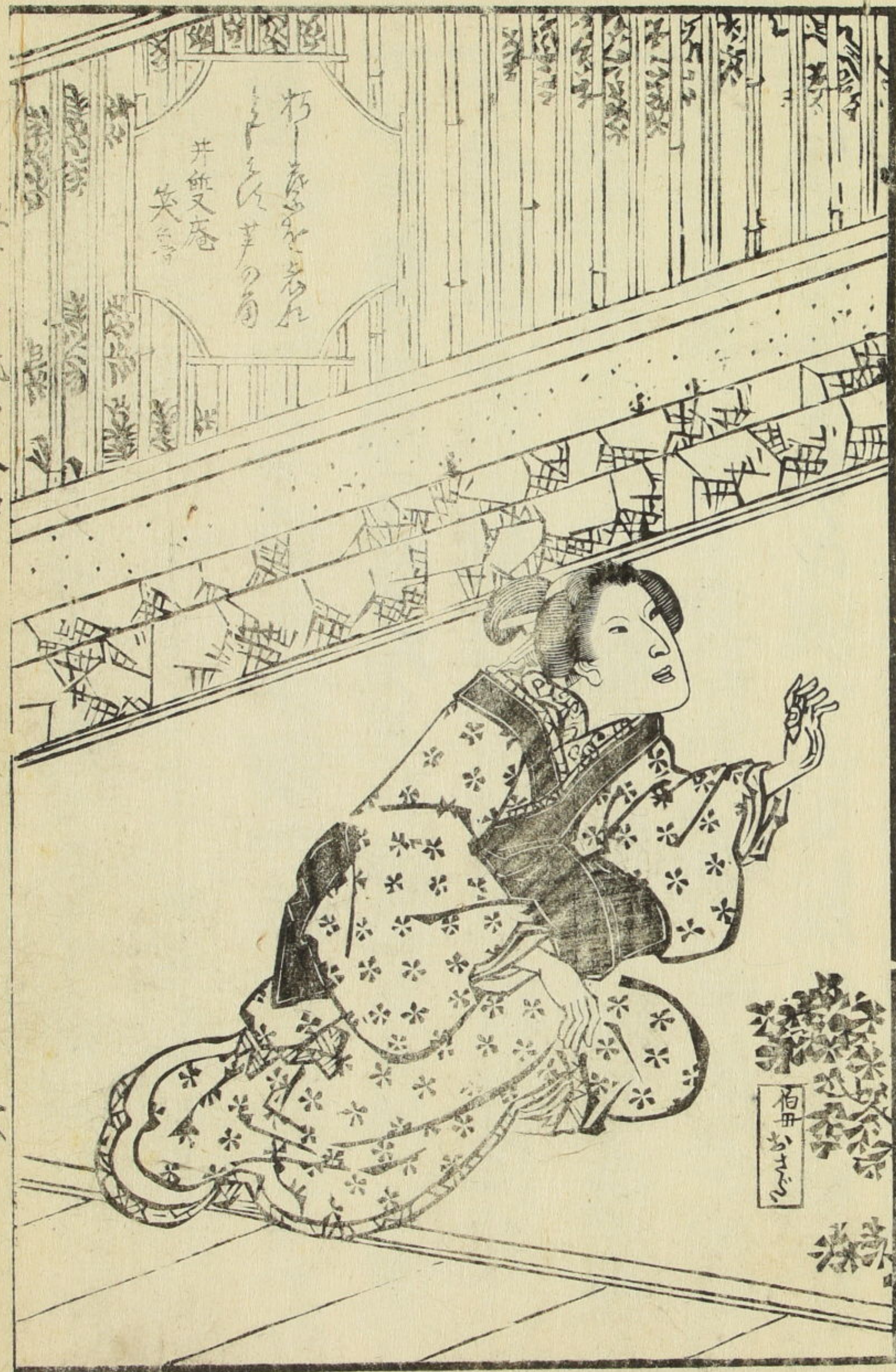
を世方極へ引取て中さのますうまも産る心むぐう
 くぐ本の實へ概も是遊がるの境アグ引取く育ま
 取極乃の心回吾を以てりや一ふ集上ま一と
 まぢわア番州さんお赤ッ坊ぐでさこうう引取く異
 とかき取の分子「マアを極りのでとさ入まを」
 届きますまの「ナセ届きませんよ」されバサ
 取の心見あも一る今の心身分ぢわアどあも仕
 ぐる一況く親毎お替も親の身是が君旦那の

心みごとの心確実な徳授でもありやア一め一どふ
 して重極るみぐ引取まるりのう「る程是が仔の助
 さんのみごとの心別お徳授へ有ま一るのが今
 取り実中一の言初うの仔の助さんより他のお
 取ま一るの由へ余人の程を為う程届もござり
 るの吾後者由下送くうり切ら替で態くまのり
 一「何率仔の助さん一云な極身作く中ま
 一「どうも取ても成ませんまのりやア君旦那より他

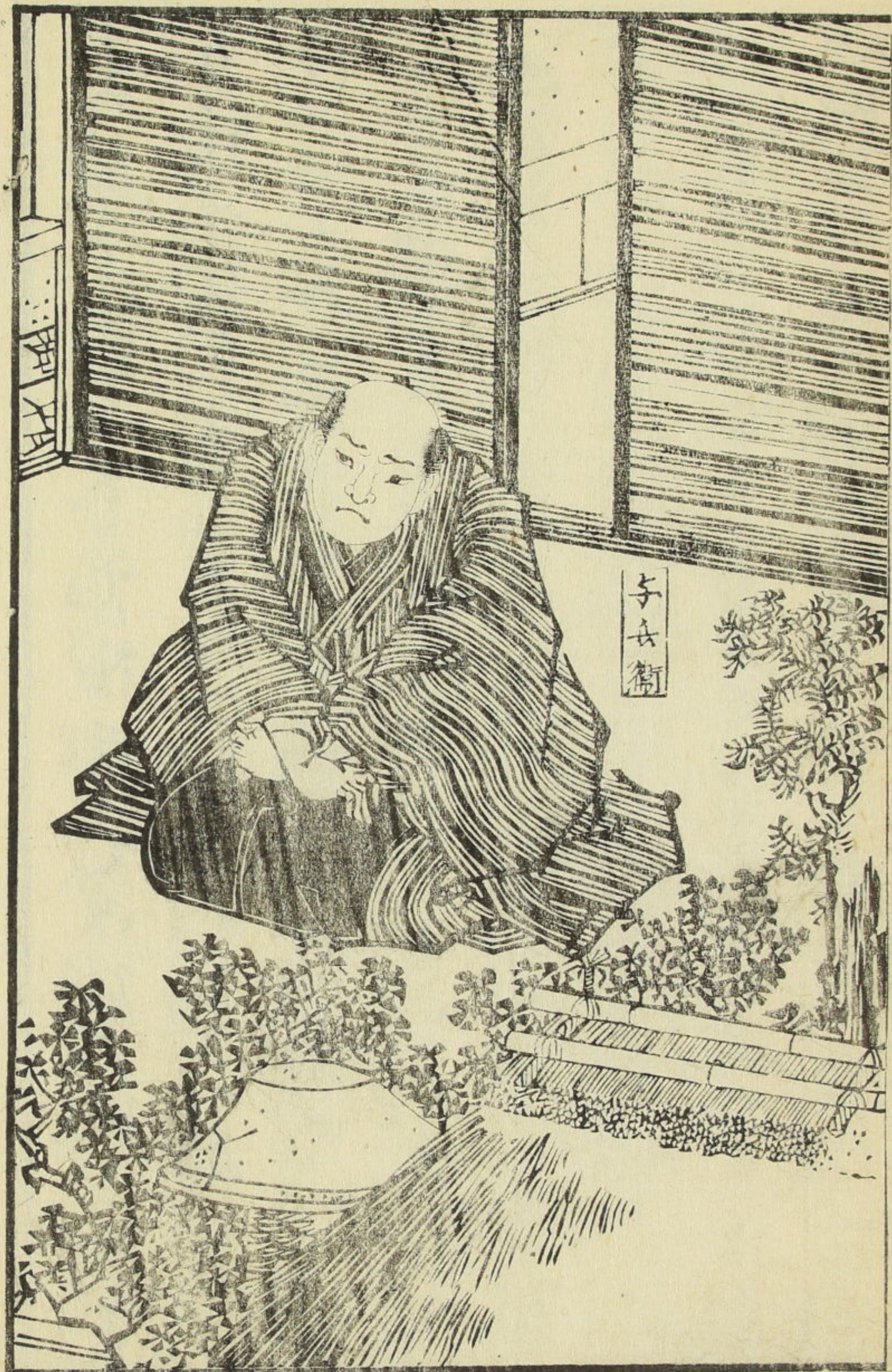
おおのちのうもあはれせんがまゝとて由登喻不
 のいぬ考の沈授時不今ぢやア君且由百年町
 町らか言さんと云い云号のか月室さんを引かて
 か情合もか睦ましく世方も知ッ法妊娠ぐ来まへ
 早く心玉産ふるるとのりま中へお母さんののりま
 をりや一と云い取あが由有まや一後まのりま
 一とくお角忘ましくお入るのを思ひ出させりて
 世も湯が泳ませむおらの乃世のりまをりま程屈

女の集りませんくう古極思ッて心取ら成とやよ
 り後母教良愛おま湯の教を打おり「まぢやア
 仔の脚さんハ肉室さんを打てみダ出来トへ一
 もたりおまごうく男のみごらうと云く大おひ
 「女のを名茶おせせの何と云い貝手極の六層
 おもあらしまろくく便りをらぬぬくう極切とくへ
 引着くねッてともござるのりまともおまごあを
 の僻郷へでも使しつとねがねても日が暮るも是

思平の七ノ一



翠の
 大
 三
 十
 五



澤
 の
 紫
 三
 十

五

後にお客を伴ひの如き人の事次第とて伝ふる日と
くハ有まじい人娼妓ハ其を伝後者とのハ中
で昔候が若衆ハ客ハ無感無慥死ハ死すぞ
己の如き人夫ぢやアあんまり石室がベイ命ハ極へ
ても女房不侍ッてきうとを言ハつて若衆より由
此後母が膝が今ハ情激と云の眼ハ涙を流せ
を打く器をよこしくいら侍と申すも此
返ハ酒後て居るうらやまの氣をひらるゝらんが

田舎でも世に侍が悪ハ用ハ取まりマア若旦那
由は花びおか出の時ハ何程も此物者を
ろあらるゝが侍が花具娼妓の方でも手置と
やらで座の階りをきまごらうしやあの方でもね
悪ハ悪答をきるけまば花びおもるゝあのこと
りりのまごめら毒隠得のよでえつたさりの東
新府へ出ても心取あげあゝぬと云るぢや
あゝりまゝ寡が賣物買りのと云ふありやア

翠の世三中

二

其近々それを今更紗に作らうと云ふ
縁を附るのハ作の巨海も目極だなる大業を
立てりヤア 家ダツて名をのるの村ぢやア
六六の出法牙が虫件小あめら海をりふ
せと尻尻まうりて眼を運立花もわらん
あれはは母の程更紗と云ふ一母仁のとんでもるの
をくら成吾隊等アト陰知切ぢやア海一舟の
もあり箱の敷るごども田畑を拵る百姓とごさへ

去々くツ死ねばとて切切らんとらまを編み
まべいぞ母村ふるまありやア吾隊等が村ぢや名
自がありすす所ふる一所小あめら
産云出の作のゆさんぐ産云出り君白を解て貫
以外イと十方もおくるを云やアがらア
西小波一舟の機があらうが金の端登があらうが
手極るす小軽急があるのう百万遍云ても
船小産せる事へ出来るのうらササト
船小産せる事へ出来るのうらササト

翠の共三

まゝの生活更へ祈ると云ふは夕ら唯々今暮
く中へト田舎風刺のひと筋不偏と云ふ
懐激井小友の眼を泣腫し小賢不筋をあつて
して中へおろく老ひわゆる多敷の境を
扱ひ列々事どもせぬ不意非ハ原未白荒忠
不忠あるぞとも意つねね女方も怒りま
別焼アダ後まといつらぬりやアグれト狗
を尚初トと牙を怒り「是吾無等を行

まの「どふも動もあるのウト勢任せふ引出せ
門不待居々信の奴庸るれども愚一人の牙の
うへありと思ふおぞやわら抱抱の作を引被
定しくおまぬの積向志うう打バ「アイタ
どふまろり視マアぐれと眼お赤をそぎて怒
おぞま性庸るの怒るれば彼威勢不憚ま
中投棄く迹形うりま回ふおまの件の後母を
「おのね危病邪ヲト云るがら戸口の卵へ突

平の武三

乙

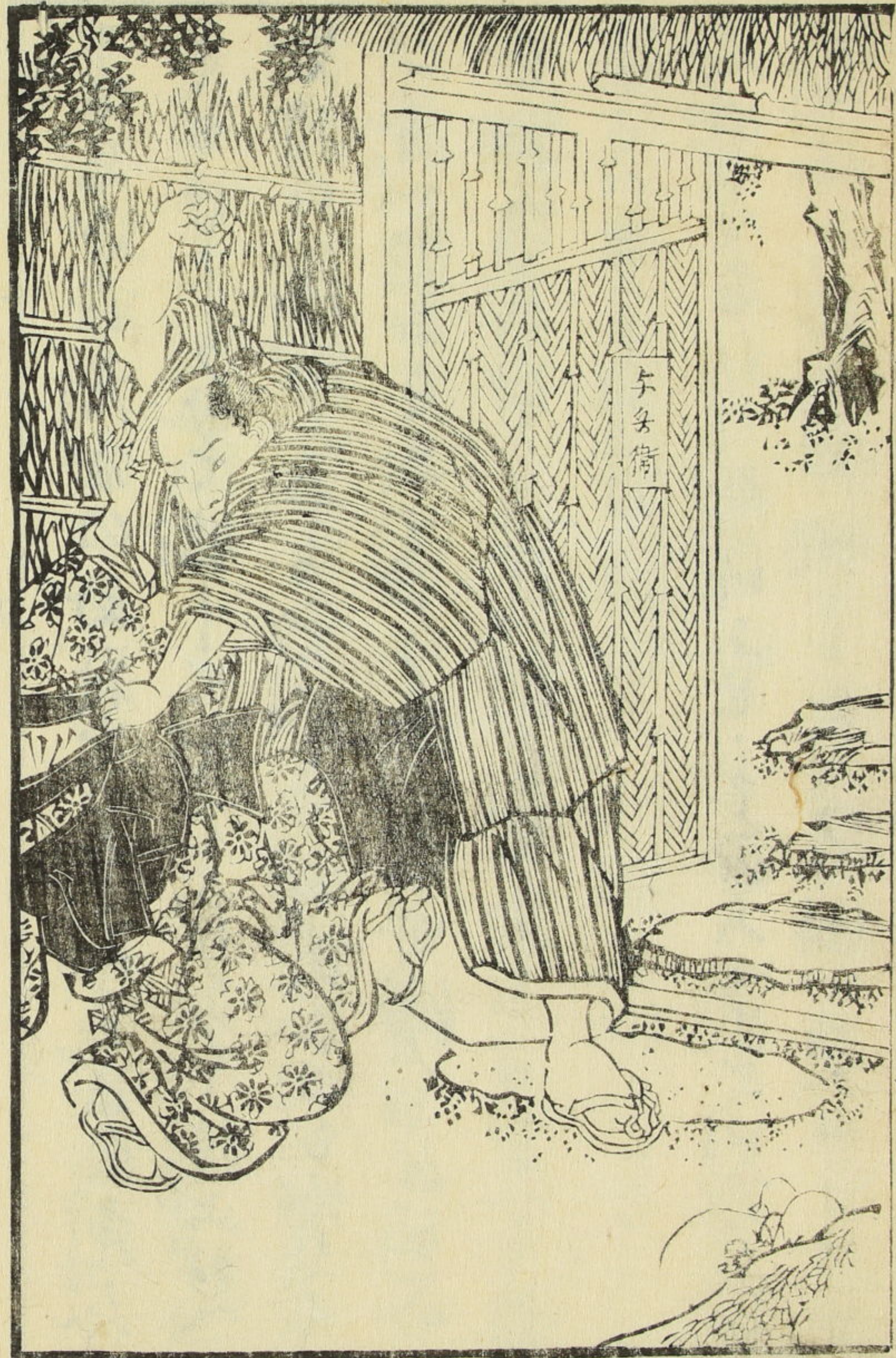
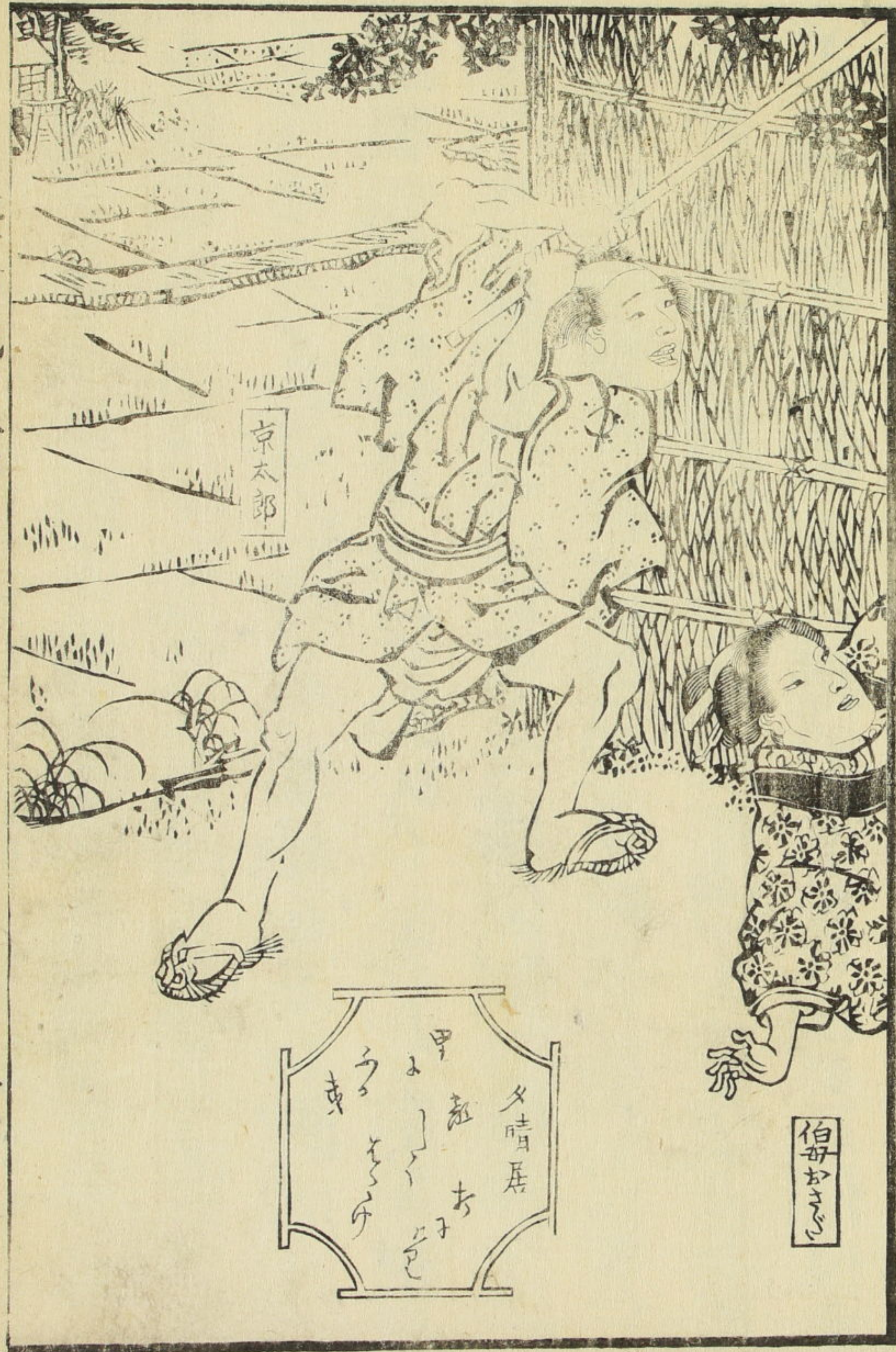
門の戸もこと積切あぞ突きと海へたぢくとよ
ろめきるぐう小石お爪づき倒と後へと留まら
まぢいあぎ並あり抱起くと籍を押し系「チ」
懐踏るをまやアダア最も後ゆめごらけタサア殺
まらら殺せア、仔の助の石雲若めと足ざり色て
向ふを白眼傍激涙もろくと瞬及ひとまをら
りるり系「は」母極泣タツテ仕方がおへ五知雲月土地
へ来く喧嘩を致ちやア換ダ今の魂糸が失切へ

でも来つら唐屋の面貸火でも名主後の唐火
ももけしうけて嚙してや「ベ」系うく泣止ねへ
先刻の儀濃とやら云取と赤園子でも喰「ベ」
と唐葱系ちお漬られ是非も漬くあこと
を押し系来し「た」へ戻りきり

第十十六回

人形もそれバ西洋おせよとりのるを口塞色
志浦お「り」て「ん」仇く女おりの返も志浦を跡七

西洋の七ノ三ノ



りやあ開の石洋不思ひ切きよ下不害をるま
 も西洋とい言活不改せし傳事あり并も被
 必の信我不厚く理非亦昭白少く決然断
 違るるを不害と思ひ遠ひくあらん茲不害
 傳の如の所是不惑多て彼極切へ岡居の後
 へ便を回禁め垂ど恙業是をうるよりく
 た久何必不主とばとて丁の傳りもあるりのを
 さる事るきい秋風の應きくを根き六續傳の

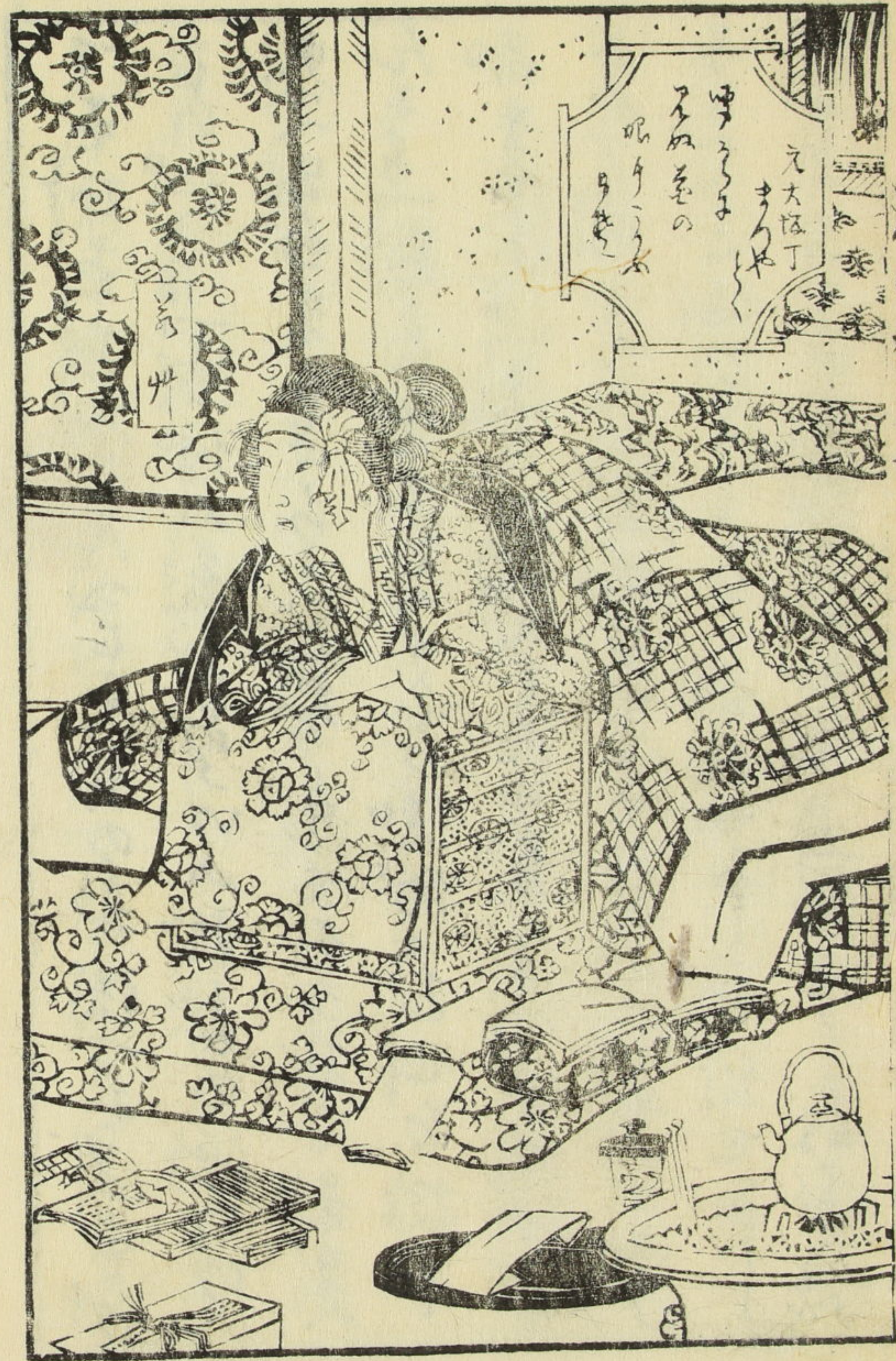
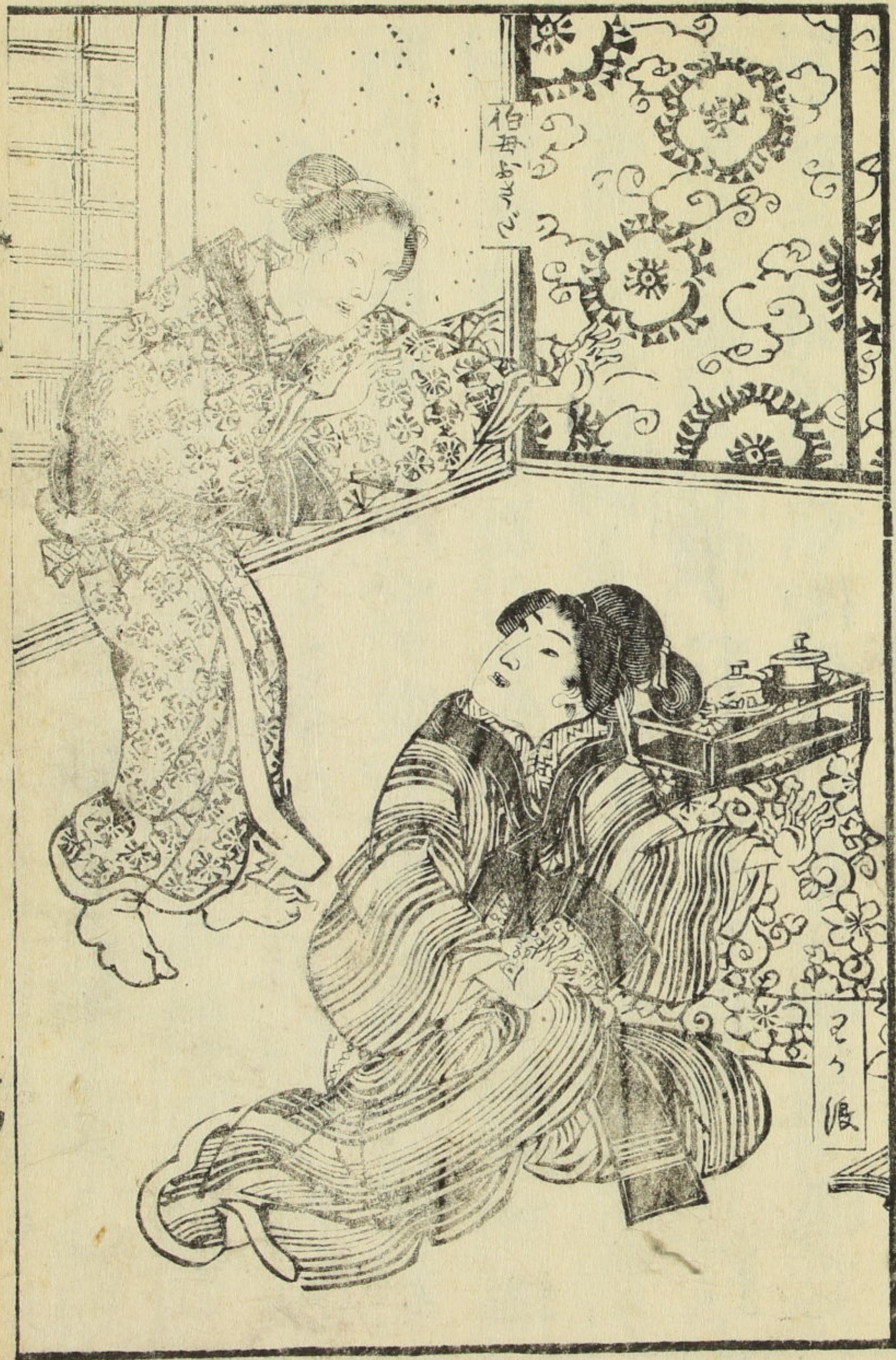
助の意あひを満て幸方へ進まきくといふ
 あいあうせきで居くと一云の同者伝はるまべきを
 朱ふ交りればいつくしう不赤きんも失出て後
 の底ま
 で怪情ふるり深りしうとお互ふるあげの情を
 信むるが
 りの相疑るま知ゆるありきり信「まにかいんか眼が
 さるまきくころ若「余ッ程毒まきくころ上「ア
 極分るあん
 多分お毒方ち匠と市村もんぞるるまきく
 若「從母えん
 へまきくぬりまへんう信「うなり進つけ
 極なるまきく
 十二

何にでも侍のまんもいよく御帯を巻掛あつて世帯
へ来ておをせと成と笑るまう〜からの怪愕然と成ませう
若一昨日あさりの猿を洗して出ておをせ成りも志望
へん君「大丈夫来る」おをせひい有まへん石詮押筆と
やうごうの来られるもの出来ませまのう何とうと
て〜とせがういゝるもの出来ぬぬ取の有まへんろ
夜系四粒の一件を懐送るのうも志望まへん信「お田
えんの事で懐送ヤア侍のまんでもあつといふもの

でまに世帯を四まんへとそおの毒位をま「ごう好
るの仁子信「吾候の急なあつりの執事の侍のい
察へ出向来るごうと思つてせせが能く来まへ
ん子君「妙とん世帯由見へるうら徒働ダとじを投く
居ませう」信「まごが世帯えんの吾へる刀子吾候
みやア解まへんが立派がいますねえおまの画之のやう
る名ごと思ひま〜ハチお困でる〜困でる〜
若「だうら〜いお世帯さまア子信「お世帯くお世帯

譯の六八三二

二二二



でも何れも使はざるのありきヨト
かおん侍のせんのかげの万由町とて
刀がせむを名ぢやア有ませんうそ
松をさく異るんせむは由
候侍のせんも苦若人ぢぬせうら
く藤々やうる夏女つ子不惚も
ごうあれて懺む多情の雲ごと
次のるより紙つ折く後母か定友の眼を
信「ホイ志んり」
「あざむすまひ」
「あひた」
「あひた」
「あひた」

怒動を合さく居るおぞ 信「ヤ後母せんは昔
芳ざのまゝとねんモシかいつんエ後母せんが
取るますとこれと若葉花をあげ
せんは葉花をすらすらう何様で夕侍の
せん不違るますと久トのいども答あざざれば
信「後母せん何様うに成ますとるか教
ひどく悪うがますヨ病悪でも悪ひの久と
云まゝ後母の影くと増まる物をか
信「あひた」
「あひた」
「あひた」
「あひた」

翠の此糸三三

十五

洋の地三三

十四

三ノ三ノ三ノ

定「先方の始末を仕へてはなす方だ驚天
べいと云出しうきて居しけれど云はぬお由居
らまぬが吾候寄でさへ後を入る腹の横激ッてん
ねんホツちり肥ッて居て敷が左様候るどかひ
指さ仔の助さんの今を氷解後が愛りト是よ
りおしくふき清より出つる事を逐一お後りて果
ハ押懐ヨ偏騙と悪名附られ戸口の卵へ突出さ
ましと歯固をみるしてのぐこれバ着茶ワット

枕ふ泣伏あ「左様と申候へ候へ候へ候へ候へ
ご自惚えよりのやくと思ッて居て袖をし
いん敷熱多くあはれんや従母さんの
對しては面目ある吾候や横激くと手を
おありし手掛を口お答え多く引裂けハ
いらんおさまを例え交てる吾候さへ横激
ッてあるまへんうらまへん
是が仔のまんお遊るましてあ人くらあふこと

三ノ三ノ三ノ

いふ理屬ぢやアるいふを勝とらひの奴が中
口を吐ことやう是れあも海故がありませう何
ともせうちあやア驚かすも志をせうのら
氣を海へかゝるまじ是れ唯の體でい
るいふをもんが氣を驚とせうか懐の毒
兎不降りますとサ何程伊のもんが邪見
でも毒思もんが件へ出た見りやア何と云つて
も血を分と寝み盡しかたに成りや毒ひ有ま

海に...

廿五

へんまごくら除り氣を懸ぶふ業を第一始
るまうとくさぬ使母を見取りて「使母もん由
怪詰めおぼるまうて懐激うごの中をうがア
五うかいんが氣を以懸るまうの海を驚く
使活するまうといひきて使母も己ふと奮發
まう不有のまう活せど死てんあ業の病ひ不降
い必定と激く心附くものうらま「各海も多
新ごらうと察しく初手ハ云出し善く居た

海に...

廿六

けきどる官位等も竟陸の入る位ありの事々たる
りの若くはさんのもよみ通う作の如き人の口より
ことりふぞる一除り録ふうけぬがよふと録へるし
く宥むれは世おはん為居けり

花菖蒲澤之紫三編中巻了

花菖蒲澤之紫三編下巻



東京

三梅亭園朝作話
山々亭有人補綴

分十七回

文進者合者之將酒者百業の長と云前漢書
合貨志不記され稍憂者莫如酒と云東方朔
傳小見人より故小聖も碑人を好むと況やど大快
ハ却く百病の養を生ず百病の多難を引出せバ
聖人よりや聖人の愚まむと由るどりそ聖人を悟ま

聖人の茶三下

ざらんされバ荒瀧經女入酒を造むる者百
生を養ふ生るの徳あり宅小飲づくる者べら
ざる者ハ酒あり一茲小例の伴も助が四目くけ
らる教醫家香馳もあり一う自懐く懐く
是由四夜路小香入とぞむ十三分の満研みく
山谷極をひよるくとよりめさるるありしが此時
丁度向ふより是由目づく伴の助小徳令度し
揚川正孝まるとなるよりの末香がと唇をるめるめら

「これや」正孝子宅小一別此来ぞ例も全盛
也情人ありうふこれハ先生お習うを以機嫌く
末「雨が降ぬテ友明友不協同され七友之路く二升
りど飲どが世お是らぬや」侯家う多うの飲ぬ
ト正孝と末「又合づらひの飲そらど正信折あしく幕中
ダ作日以報ひいひとそ有明七五弟とまを六別とぞと
も揚屋とる厚やうが答急仕せ初る不存平一う子
正「指儀が今日ハ禮善不病乳を舞不出うけるの

釋の此

二

どつら雪内一積口就トやせうま「必用とあゝバ 陰術
るーダ 痛考ハ何雨ヲなせぬガ醫ハ仁術ガ不傳ト
見舞く細体と何う先方ハ何西ダト申聞クも
とんどお小出と申すと申人ト後取ハ一卜筋乃代へ返
べさお海申あゝ後バ「陰世ハ仁術と小言て申ナニ
陰世とハ失致極る「イ工殿ハ陽世と云ら申えん
けんのんごとく「このまゝ一魚河と病入ハ何事と
無事波あふる橋幣小媚る雨存ぞハ毛阻るい

「唯仁術子申「いふ中申「他申もどき人やせん
先生も兼く以知己の病草せんか世ハ病部
と石漢の寮小由左ら次ハ病く索やうと
思ッて由自かん小管係く老今日小及ぶやうる
理屋サ申「申んごア、相屋屋の病草友主ガ不
例と寮へ出書生ダ本人と笑さるうち見え
病うと病と申香改く一面舎の知己とあゝ
を棄るハ我小あゝせされハ魚好申友としく

釋の紫三下

三一

匠者ハ復者小醫者と云まて正「以出らぬ」の
余計多寡をせしん我欲怒しちやラのけません
せま「件ハ美く」ん場てあるサア性うと東富らよ
るめく足と滑くめて急くとまきどま加どらの老
朽く小石小顔強べ「どのこの流重ホ」大丈
支金の脇居由古個イミト石減口をガ持らるさ
竟行くくと石流のまを松系居が察へ到ま
正「ア先生家なく」潜戸が拒つら大内業権を

痛めあふる東「これハ拒イ福祿壽の出入お協
老ト云つ海流よりたりへ曲り務手口乃
隙子を明正孝系居以又と舞小集とくりと云
入まけは此方へ来よとの案内小連彼系
が痛下へ通まは信「マア孝をん能お出るま」と
正「室小を肉ハ自己も久く横濱へ集つて出
及る積りの雨が彼是隙あまして信とも彼とも
中上極ゆるの正「阿沙汰拾一時」ぬりまて京

釋の茶三三

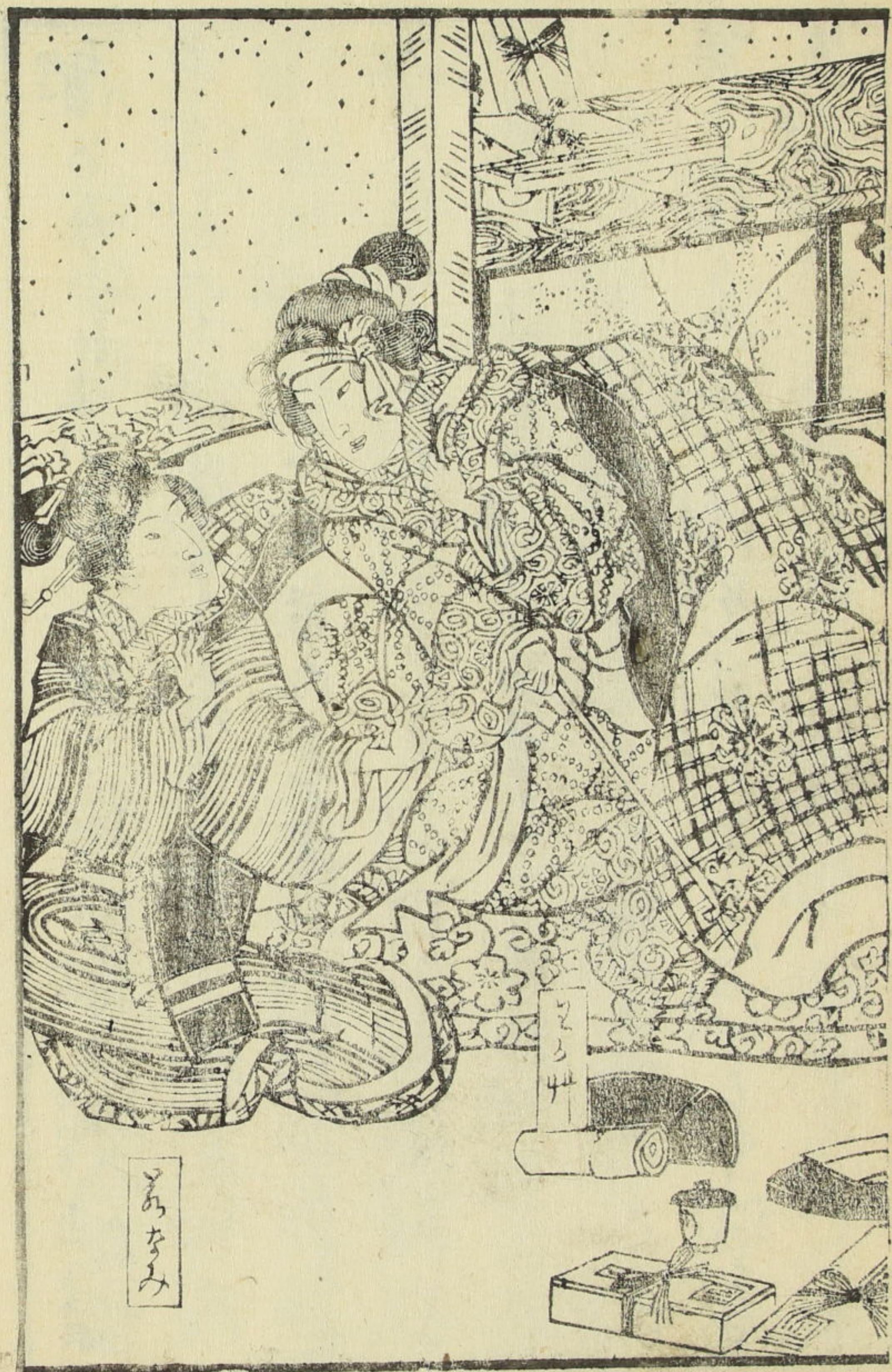


龍信居 五龍

あやや
あやの葉

正奉

東喬



あやの葉

あやの葉

あやの葉

橋のて白あさんの心産女へ種とおいらんが
ひとりの話とて笑て驚きつゝやゝ「何れ
さのます久橋濱おやゝ正孝さんおやいのくと
のよ弦妓宿があるところのよるをまうと
種るまうと云ふ大遠ひ廿世欲張の種りて出
る所が欲張お由何おあるま大夜聲といふの
てに息を返つと集トやゝ「部人から話を
史系村重を枕せりさげ「正孝さん種心出

るまうと云ふ「おいらんの心種お心懸ひ何
も治さんお心種〜ゆま種る種故と皆を
お存ませま一世の晩白あさんの心産女と
心種子をか笑りおして名故を今日まますと
種とまあさんお進て此方へ出るともまとは
一のおま事と云つと来まうと云ふ何種と云
ま「何種も紋さん便お入まつて居つと種
何れお心種子のあらざる前へ是種もあ

史系村重を枕せり

五

以来の東宮が伺うさまは六神連の金快がこれ
 づくが法を更例の更禱く信「奉儀と云つて
 るまをヨま「た相であるの前ふして獲る者後あ
 て継承といふが東喬たやうる踏房者といふ仇
 一車へ教垂の法が肝心の脚を伺う此時
 正者眼とぬく止と制一けまばお信ささくり
 空言成信「雅有うごぬまが唯ツタ今「おまお
 の業と成るまうさうら他の心業へとる一日と

見あ己せる積りで共めうま「意女子とか人妻い
 さい夕縁をさ元生へなうごい信「鶴庵く縁
 甚ふゆあいの成云るまをまはさうと此の
 ちんふ意るまうま「垢切へ後持以来る係由ん
 介の名沙法とさうが日暮君が不例ごとと云
 づくお人ごめう死散せえ務とが前方と違つと
 大持店法と元がえあれてい人る附合やせん
 君といふのい意母さんでせう子ト眼つをみまと志う

ままど原認辨のうへ多れば憂由附く症を進
 ますと「これハ怪らぬ心ある」云々
 万年町々「引取タ新辨以察サ閑番が去の爲
 女だ後休の右隣ハ彼の先氏が安と候候へ引取
 心云氣く奈と教へ教と候と候と候合の宜
 子比異連理ハ多んのその不儀彼のお方女の病
 と懐胎と病素〜〜が果して的確ダト何所へを
 急由月燈の使せく懸さるべきと候と候と候

巻をバコレサ〜と正孝が杖を引く止め〜と出小
 由急勇度多く多言れば正孝たまり子云「先
 生マア此方ハかまらぬ困るぢやアねり〜と云
 のごト引と候と候「これハ失致是ハ失致正孝子不
 信せど〜と云るの〜云「何程も新由有ヤア〜ねり
 溜さん宅小海ませんかいらんが候信「宜さん
 云「麻連く往て呉るま〜云「京来云云
 云「正孝子自己せど〜と云る云「信く信走く〜と云る

角の邪へお出らぬと無理な事を致さぬと
 潜戸の外へ押中へ正先生困るぢやアねえ
 が困る事なく困る事なく多分ハ届くんが方ねえ
 ハ用事なく正先生除く得る事なくおぢさん
 を手荒くぢやアねえ一回ぢさん
 体不活このダツておぢさん
 役だ何となくぢやアねえ
 由疾めり 肚痛ぢやアねえ
 のおぢさんが届切へ困る

本意も油断もあることありの
 熱く床も悪極る縁故サ件々
 葉が強なる事一歳ほど
 悪くダと云ふ事して来り
 ねえ事一葉トある事
 倦む年明けして来り
 丈ぢやア形後やせう
 尻危く一葉をらうと

お侍もく指場も 鈍尻鹿お刺さけり

才十八回

偏お志うん有り若茶が後母の指へ侍の御より
重お笑るるるるお六十ヲお二ツの作りのあるこ
おもあうぞと妙へん憑お思ひーが今赤番
の云つるると刻符を合まどくられバ物々
と追仔の恥お偽欺まーがまま中し替時枕
お顔をあて歯を答トく泣居るりーが風と

急来る嫉妬の云むワくことむりり創整く手近
おありー志うそ大陣とありーと前へ引あまは
若治誓さ後より抱る信「モ」かいらん志うり
おるまーヨおごままヨダグおのうんつまうるあ
氣と出ーく呉こるまもるヨ體が大事ござせよ
己れて後せ振取り若治せん信思ーく呉こる
まー侍のまんお阻ッちわア此指る碯橋いあるま
いと惚まそく惚ぬのく忽体るあが磨利支天

譯の...

板や乃了極つる四昔芳う十年季が明く歩るま
てハ男の言の愛らぬやうあとかか忍ひりあしこ甲
愛ゆゑかお言さんふん極るむりう愛るやと居る
ゆゑと体めあもき愛らういハ使りをしてあゆんば
骨も癒るまの史とも使りしてさえ由お言さん
嫉妬くお云るますうモし何のらん史ぢやアあんま
り酷辱でせう各侮や憤激る涙らん体もさ
毛版が立つりのるふく空の中へ煙く垂るる

焼火箸を引出せばお涙が流「おらん涙をさすま
何指しなまそのごとぬてもはびぞ舟底枕の法異
み附し何の脚がれおふおのぬ更骨も通ま
と突さるる抱さぬらる若涙がかわぬの
るらまそのと舟の毛由よごつみぞ「怖しハ
らさす何せらぬまそのまらあゝ意ふるんるま
すナヨ若「堪忍して呉るまし是れ狗が求解し
志すし「信「各侮やア中ぞ狗が懐氣く寝まを

世の世

上

「西の毒でもどが薬を費く異るす一る位か何
 ても薬をか勝しあふのちや夕のけまへん正實か
 のらんつものるの氣をか出するまをナト梅氣をひ
 く氣流が薬費トみ立梅中く傍へ寄し手算
 首の引中一明く名出まへ父重重が亡後の代志
 みせよと一ふぬぬ能練ふ能練し小刀ありやとら
 茶小刀の鞘と神ひくつとくと庭を目づけてあめ
 申く後窓を名流し中り庭くをりあ位「かひん

か待あす一と抱置まばあ「氣流せん候生と思ひく
 難一るす一と云つ後振向しが眼へ送物く赤と
 そとぎ怒氣流面小敵まえ茶の煎ゆ雨へや十餘利
 女が子と素む湯由砂中とあやしむをうりまの
 ろらむちのふふ友者重さ氷のぬ陰し持あぞ
 いよく醫さ信「候母らんく疾く来く異るまはし
 急急お流從母か定ハ為附款ふ紙門を明けま
 史やと書候為も今次のるくと生辭及が信と

笑懐激つゝ疎心で膽が入まらぬわが又うら
 つまらむと云つゝ病氣も降つちわア悪るうべいと息
 を殺して泣く居やうと義理も情も先方
 此方弱氣に懐激るべし言地もなけれは後
 之ぬ言ふも言方の思ひ通り仔の御史婦と咒
 咀てまき氣浪さん若菜も是るどふ思ひ措々
 男め来迫と云うと一娼妓ありやとを史でも海
 が素人あつた海やすまの仔の御さんでも系の子

小来くまのうらむ志らん子取詮退色ぬ此度
 の大痛せめてもの意趣嘆現在の後母が得ん
 控へてくる此のうらとさせてまわつてやうと云
 きく浪情式思えど親方の後母が承知とあ
 る小詮才屋と抱く子をとるせば若菜腕見も
 せず庭へつゝ松の本をまきぬ白服も小衫も
 祓ぐふへ悪鬼危神様らの若菜の命と結め碇
 為男の仔の御をまきぬ殺して悔ませく又碇

不具ふるさとしめめへと揺返くくろ久く呪咀ふ
光系と若治ハ重怖く教そむけ残慄震え
く居れども後母ハ完ホとホ笑ハ小匂味
と七縁ハ若業留も悪鬼陸利天魔被祓と
兎胆豆父ダ記念の小カと逆手小持く松の本へ
精ふらして突急くがさむろりめよりとる
臂カ足ひ小十倍くさく由小松の大本へ相陰除
さぞ突通せふくざや此時松ダ枝の風えりさ

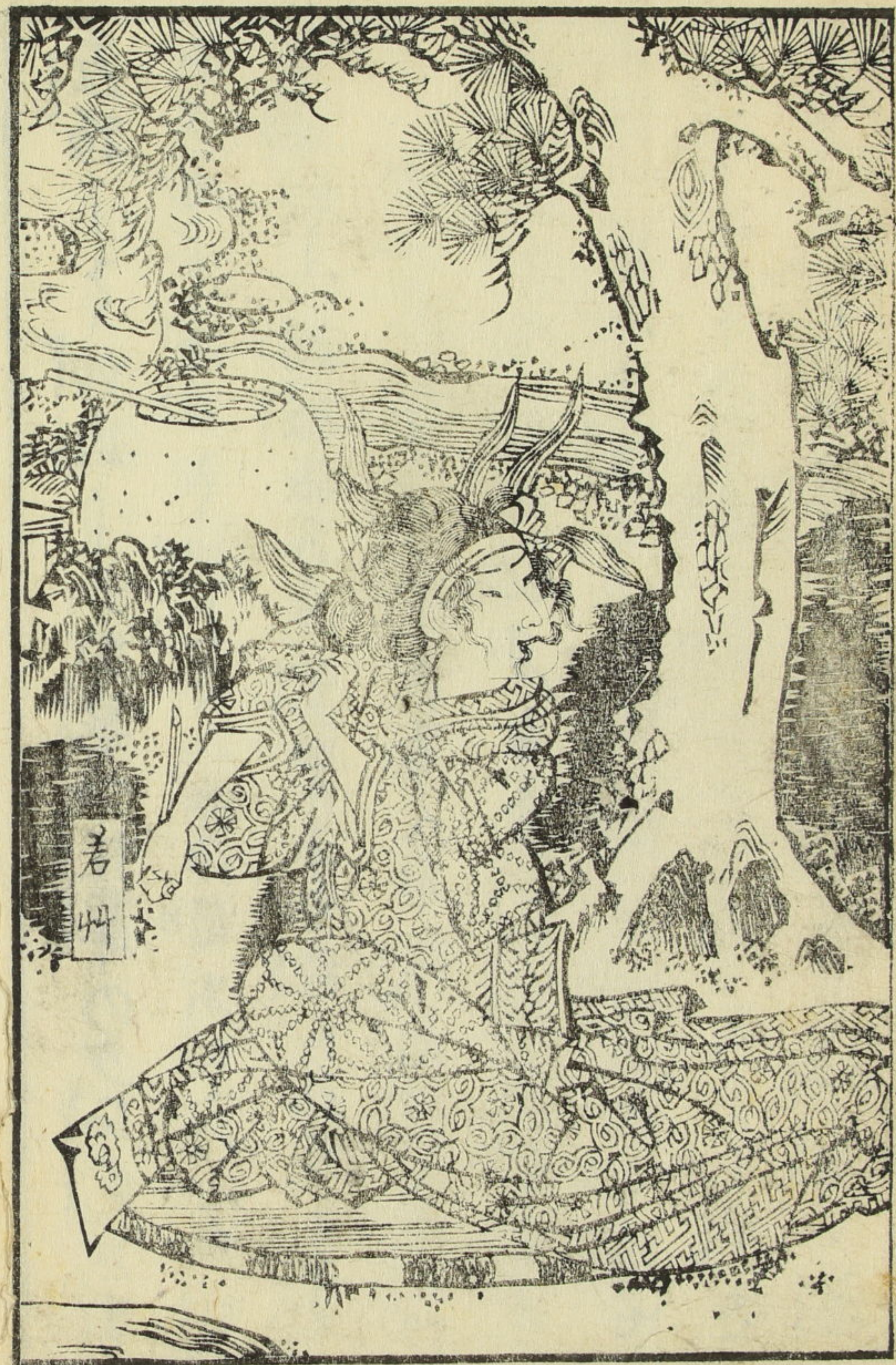
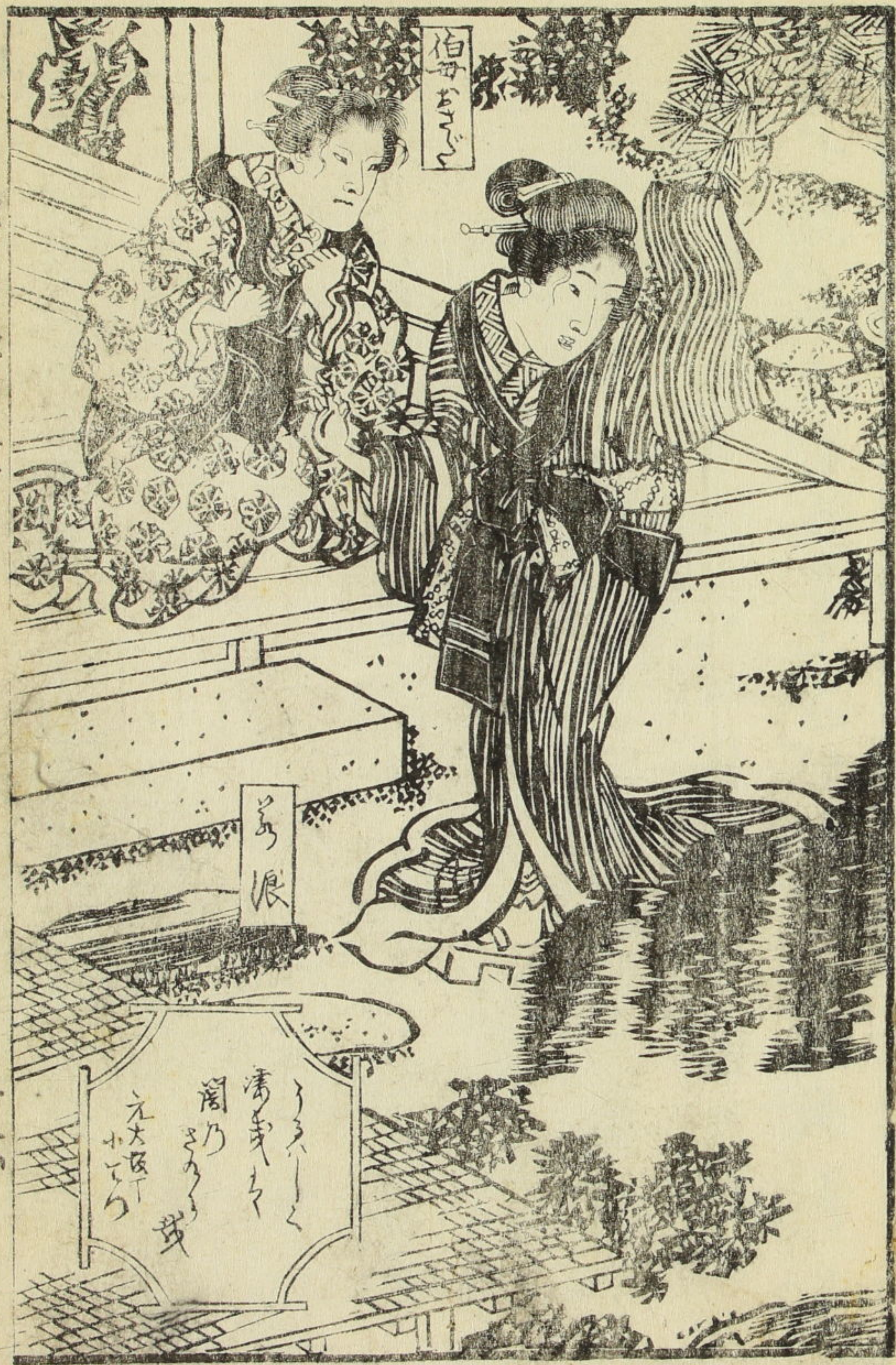
ふへく折まきく下枝庭へ落れれば若業完
糸とうち笑まきく「うまきーや強ハ限く強
信「かろんぬーやア怖しい氣ふ懐るすーと子
美「吾儂やア鬼ふ懐くこと云さぬ極みぶつう
と倒まき起あがるべと氣力多く若業果る光
系あれば後母のお宣と若治ダ女抱るく
孫禰へ毒させ信「おいらん業を吹るすまう
ふ志すせうと云くろまう小まわくと毒入

畢の世宗三二二

一四

極子きやくし小こ敷し具ぐとと忌よせせ寐ねくくてて垂たくくググ小こ津つ時とき
 主まどもも眠ねををのの光ひささねねのの宿しゆく「かののううんんくくトトゆり
 怒いかせせのの眼めをを見みてて「君浪なみのををんん吾わが侮あはれれややこれこれをを
 正ただ雲ぐも小こ水みづ解とけけたたととままヨヨかか赤あか極きやくああらら種たねくく若わ
 芳よしををううけけてて涙なみだままへへんんモモ逆さか母ははををんん走はいいくく雨あめをを
 ざざくくかか喉のどああせせののああくくてて室むろ小こ涙なみだままへへんん若わ一ひと吾わが侮あは
 がが死しすすくくくくららかか赤あかををんんがが徳とく人ひととと吾わが侮あはれれののままをを
 今いまをを此こゝ地ちののああららははにに流ながれれををんん小こ徳とくくく異いふふままああくく

左ひだり極きやく一ひとくく切き通とお一ひとののおお墓はかへへ埋うめめののがが正ただ雲ぐもととまま
 ままがが死しににがが途みち出でるる父ちちととさんさん小このの目めみみううつつててもも身み
 のの姿すがたののううらら細こま岐ぎみみありあり主ま男おとこみみ由よし控まかええらられれててととうう
 くく死しににとと来きまますす一ひととといいふふああんんがが殊こと面おもて皮かわでもも云い
 敷しくくががまますす極きやく小こ親おやがが由よしああららはは吾わが侮あはれれ血ち裏うら集あまりまり
 のの被おほてて異い人ひとのの骨ほねままへへんんううらら死しににとと祈いのはは世よにに宿しゆく也なり
 由よし後あと母ははををんんのの方かたへへ引ひききつつてて異いふふここるるままああははれれをを
 ッッののりりがが死しににまますすトトああららはは合あははれれとと極きやく親おやをを亦また



善法を思ひ返りて是の善法をんまに善法
 の中の引出さし小極の中程があるから既に
 るまに法に引かぬていあげます子が縁を
 するを云ふまはる今の善法を死してかたまり
 してあるがあるが死んでまうかいとん何年か
 しまし持てた一箇法に引かぬていあげます
 ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
 候つて法合と云ふまはることを樂しむ風
 候つて

して是のまう人の善法を思ひ返りて是の善法
 善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法
 て善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法
 せんふ別りや善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法
 のんを善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法
 張成り善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法
 候まを善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法
 るまを善法を思ひ返りて是の善法を思ひ返りて是の善法

善法の法三下

仔細のせんがほにれらるる海をぬり水の船を視て
 その時お笑つておろく呉る事ト云つ梯と中舌を
 お室の前へさへ出し「母をんたりやア女の省懐
 かと窮迫中と父とさんだ實の信を愛づく中
 まるこのでまがみ品を捌とも何程ともして俸平次
 して中といと託バ不責の後母お室座の世も
 祝身とてい唯きくする君も先立のる老が
 身へもしく海に冠障ト自己を致し是を悲しと

ち方涙の涙さうりなり形くあるとるるじと見海
 徳く後母お室を中産お振立て痛痺の考あふれが
 君も角も醫者を志しては宇えんとつるお後母も實
 もとを察察りの爺お令ト幼形也事とせが醫
 師の志るもるお令とる事儀は小星愛を生トて
 是と同處を喰しめ積りてる事ぶたふあうぞと
 体いふお中児の痛む驚風と云りのお似これ
 史職活とてを過る職醫と進めど繪多く十九才

澤の巻三十一

と一期と一てついで事こと不果ふぐわ致いたるありや一ありと云いふ
ももありあり

足これよりさう若わかききが怒おこりり候まうの助すけ不ふ出でるるしし持も股こ痛いたむ
物ものむむののああめめりりよりより形かたちるるるる事こと候まうの助すけがが遠とほるるハハ海うみ
を大尾おほいとしてして巻まをを収おさめめるる中なかにに寄よりり入いるる事こと候まう
あるハハ津つのの檢けん査さししてて一一くく近ちか日ひ登のぼりり候まうはは色いろばばおお智ちまま
心こころ高たか直ただのの事ことをを希ねがひひ

元音蒲津之巻三十一



